

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日
令和元年七月一日発
百二十二巻第七号

ホトトギス

七月号



風雅の小筥「十八」

廣太郎

この稿を書いているのが平成三十一年四月三日で、この一日に来月五月一日改元の「令和」という年号が発表された。ホトトギスは明治、大正、昭和、平成、そして令和と五つの年号を発行して来た事になるが、今一番正念場を迎えているように思えてならない。皆様の御支援を切にお願い申し上げます。

さて、今月も季節についてであるが、最近野分会で一つの試みとして、『ホトトギス新歳時記』に載っていない季節の言葉を新季節として詠んでみようかという事になった。「野分会一句百言」でも触れるが、今迄に詠まれたのは「ボジョレーヌーボー」「サンタクロース」「阪神忌」等で、取り敢えず今回はこの三つを紹介するが、他社発行の歳時記に載っているのを御覧になった方もおられるだろう。特に阪神忌は、御存知の通りかの平成七年一月十七日に勃発した阪神・淡路大震災の追悼の言葉で、野分会芦屋例会のメンバーは殆ど何らかの被害に遭われた方であり、それなりの経験を踏まえた句を詠んでおられた。

『ホトトギス新歳時記』は第三版において新季節を三十語ばかり採用したが、やはり新季節として歳時記に掲載されるといふ事の絶対条件として、例句となるべき良い句が必要である。以前からこれは申し上げている事だが、季節が先ずある、というのではなく、その季節の言葉を詠んだ名句が例句として必要である。だからこそ、果敢にその言葉を俳句に詠むという事も大切である。

句日記 汀子

平成三十年七月一日 下萌句会

持っただけで安心感のある扇
逆縁に耐へ暑さにも耐ふる友
免許まだ返上せざるサンゲラス
一枚の玻璃が境界金魚虫
欠席の多き暑き日なりしこと

七月二日 ロイヤル俳壇

巡り来し七月ロイヤル文化祭
月見草より旅心育ちゆく
虹消えて生活のリズム戻りけり
お隣への扇の風を頂きぬ
人悼む心は消えず月見草

七月九日 アサヒカルチャ

災害は大地の吐息暑さまた
皆無事の顔を揃へて夏の句座
これよりの暑さに耐へてゆくのみぞ

七月十日 大阪倶楽部

夕立の真只中の旅帰り
涼しさを勿体なしと思ふ日よ
気のかかぬほどの日焼でありしかな
日焼して健康さうと言はれたる
悲しみの友に涼しさ届けたく

七月十日 綿業倶楽部

立ち上る大地踏まへて虹の脚
虹消えていつもの街でなかりけり
虹立ちし話にいつか加はりぬ
涼しさにもてなす心ありにけり
日の落ちて涼しき帰路となるを待つ

七月十二日 清交社

梅雨明けし昨日の今日でありしかな
我が一步船虫消えてをりにけり
終戦の記憶夾竹桃咲けば
逆縁の友に梅雨明待たれたる
梅雨明の待たるる旅路あることを
船虫の行方は追はず浜辺歩す
逆縁の悲しみ梅雨の明くるとも

七月十三日 工業倶楽部

遠き旅近き旅あり月見草
一と夕立欲しき都会でありしこと
七月十四日 石見ホトトギス俳句大会前日句会
山の風何と心地のよき汗よ
邂逅の句碑と心の歩一歩ずつ
合歓の花つづり三瓶の旅となる
汗引きて三瓶の水を飲み干せり
手の届きさうな雲あり夏の山

七月十五日 石見ホトトギス俳句大会

都会にはなき星空と涼しさと
山の關とはこんなにも星涼し
露涼しければ三瓶の朝動く
汗の顔揃へば五句で一句会
汗の顔揃へば五句で一句会
汗の顔揃へば五句で一句会

七月十六日 地球ボランティア句会

汗の顔揃へば五句で一句会
汗の顔揃へば五句で一句会
汗の顔揃へば五句で一句会
合歓の花心に栞りたる集ひ
露涼しかりし昨日の旅語る
総会といふ海の日はかりごと

七月十七日 有恒俳句会

どこまでも空の変幻雲の峰
星涼しかりし旅路も終りたる
雑踏は祇園祭でありしかな
合歓の花つづる旅路も帰路となる

皆汗をぬぐひつゝ来て席に着く
約束は祇園祭を優先す
七月十七日 無名会
旅終へてほつと一と息露涼し
健康な汗の仲間でありしかな
旅終へて汗をしづめてゆきにけり
露涼し又来年を約す会
こんなにも見える涼しき山の星

七月十八日 夏潮句会

花水解けて解けざる心あり
暑さには慣るといふはなかりけり
片陰に心ととのへたる一歩
夕立の心ととのへたる一歩
夕立のあると予報を聞くばかり
昔昔の水中花咲かせみる
喪に籠る友に見せたき花水

七月十九日 関西草樹会八百回

祝ぎ心持ちて涼しき集ひあり
邂逅の涼しき出会ひ持ち寄りて
祝ぎ心極まりゆけり炎天下
羅に心をまとひ来られけり
七月二十日 アネモネ句会
ふりかへる旅なつかしく露涼し

七月二十日 アネモネ句会

月見草三瓶の旅も終りたる
乗り越えて行かねばならぬ暑さかな
旅終へて又次の旅露涼し
一斉に扇の風の動きけり
七月二十六日 きざらぎ会
留守番のパナナに添へてある手紙
暑さ乗り越えて行くとき力あり

七月二十六日 きざらぎ会

留守番のパナナに添へてある手紙
暑さ乗り越えて行くとき力あり
夜は星の彩る山路とて涼し

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年七月一日 青風会片屋例会

川床灯のよりはんなりと暮るる街
着地して天道虫の色となる
天道虫実はサンバは苦手なの
水音の風音に川床灯り初む
指といふ発射台より天道虫

七月五日 蕉心会

水無月の日本列島水浸し
水無月の川のうねりでありにけり
端居してロシアに心馳せし夜
屋灯す水上バスの灯涼し
寝不足のメロンに目覚めゆく
水底に風を感じてゐる金魚
大南風巨船の水尾を歪めゆく

七月六日 カトリック新聞選考時

百万の薔薇でも足らぬ慶事かな
ひらがなのやうに驚舞ふ青田かな
黒南風に攻められてゐる天守閣
出水禍に欠席の人案じたる

七月七、八日 東海ホトトギス同人会、大会

戦国の城平成の冷房裡
明易や雲切れてゆくきれてゆく
水無月の水惑星の水禍かな
日本に虚子居て芭蕉ゐて涼し

七月九日 朝日カルチャー若草旬会

西軍に東軍に城涼しかり
雨止んで星へ誘ふ床涼み
ナイターや鼯肩チームの明と暗
激辛のカレー涼しく食べ佳人
浜風といふナイターの応援歌

ナイターの果てて終電までの美酒
七月十日 むさし野吟行会

開港の明治を偲び露涼し
涼風の洗ひ上げたる港町
登山めくフランス山といふ斜面
氷川丸虚子の世を知る涼しさに
七月十一日 「俳句界」七・七豪雨被害を悼む

七月十二日 土筆会

祈ること願ふことこの出水禍に
水無月の水に無力となりし町
七色に毛を震はせて毛虫這ふ
南国の吐息もろともマンガ―食ふ
街騒を消して都心の万緑裡

七月十三日 浜田吟行会

極暑発ち極暑へ七時間の旅
夏潮や日本海てふ音階に
ノジュールといふ夏潮の置土産
涼しさを連れて隣道抜けにけり
潮騒の遠退いてゆく暑さかな
夏潮の引いてノジュール明かしゆく

七月十四、十五日 石見ホトトギス大会

万緑も今夜の星の前座かな
平蝶の纏むることを運命とし
夏飲の花朝の色といふ孤高
見下せば満開となる合飲の花

七月十七日 北國文芸選考時

同人の司教誕生灯涼し
夜店でもつと光つてゐた指環
夜店の灯ガソリンの香に点りゆく
夕焼の彼方帰天の君偲ぶ
夜店の灯星も加勢をしてをりぬ
灯涼し句友の慶事又一つ

七月二十日 青風会東京例会

大芝生距離を保ちて昼寝人
冷房を入れてより句座整へる
風鈴に大都中の時一寸止り
句座漫る心中既に暑氣払ひ

七月二十四日 若水旬会

義仲寺の狭庭の要花芭蕉
鳴くものの起承転結夜の秋
屋寝覚漸く夢で会へました
蕉翁の真筆展や花芭蕉
復興の槌音の中三尺寝

七月二十五日 目黒学園旬会

病葉に確と宿りし森の精
夜の秋星と存問する時間
ギヤマンの皿を褥に青山椒
青山椒色に欺かれる辛さ
夜の秋少しワインは重口に
団樂の話題増えゆく夜の秋
病葉に森の脈はひありにけり

七月二十六日 静の会

サンングラス掛ければ本音言へる君
白服を風に撰はれさうな君
艦涼し三十センチ砲の黙
護衛艦潜水艦に秋近し
横須賀の蟬は軍艦マーチめく
露涼し空母のやうな護衛艦

七月三十三日 あうたう旬会

一段とガイド博識声涼し
水打つて江戸の風呼ぶ老舗かな
雲の峰今宵火星を引き寄せて

雑詠 廣太郎 選

時間とは美しくするもの実朝忌 大阪 福本恵夢
 窓の外は日々の音なり君子蘭 同
 余寒の刃レタスの青をまつぶたつ 同
 大空は動き大地は冴返る 神戸 山田佳乃
 紅梅の香れば九年てふ月日 同
 早春や街のあはひに海見えて 同
 三月の明日は悼む日旅晴れず 長岡 安原 葉
 剪定や遠き山並まだ白く 同
 春眠の軽き鼾も彼らしく 同
 蛇穴を出てしばらくはきよとんとす 神戸 藤井啓子
 雛飾りつつわが指の太さかな 同
 浪人の危機迫りたる二月尽 同
 貝寄風や浜の亡骸美しく 東京 田丸千種
 貝寄風や佃島にも住吉つさん 同
 曲水や香の滞るひとところ 同
 なやらひの大幔幕は子らの席 福山 竹下陶子
 存問の俳句に春の立ちにけり 同
 書初の筆力のなほ衰へず 同

海は紺空は灰色磯竈 袋井 湖東紀子
 光とは別の眩しさ梅真白 同
 川曲がる時菜の花の黄も曲がる 同
 手庇といふものをして冬あたたか 熊本 岩岡中正
 青き踏むとは歳月をふむごとし 同
 翼ひろげて春潮の寄せて来る 同
 口紅を引き直しみる春の風邪 龍ヶ崎 今橋眞理子
 早春の空へと解けて雲の端 同
 枝ぶりを失ふほどに野梅咲く 同
 子は母となり古雛となりけり 京都 山崎貴子
 里帰りせし子の居場所春炬燵 同
 離れたるときに梅の香届きけり 同
 立春やかたむく地球なればこそ 東京 橋本くに彦
 早春の物景伸びて伸びて行く 同
 香煙の紫にほふ春立つ日 同
 豆を撒く八坂神社の舞台より 神戸 後藤比奈夫
 舞子たち脂粉惜まらず豆撒ける 同
 拾ひたし舞子の撒ける豆ならば 同
 大寺を包み降るらむ木の芽雨 東京 今井千鶴子
 温かきコーンポタージュ春の雨 同
 花を待ついつもは開けぬ窓を開け 同
 惜しまれてなほ惜しまれて菫散り 同
 摘み飽いて旅立つ天になほ菫 同
 菫摘むうしる姿の妻に似て 同
 同 河野昭彦

雑詠句評（六月号より）

亡き妻のレシピを継ぎし雑煮かな 東京 河野昭彦

亡き奥様の美奇様はお料理上手でも知られていた。筆者も御馳走になったことがあるが、一流のレストランで頂くようなそれは見事な料理であった。

亡くなられた後も、この家の味として、どなたかが継がれている。レシピを受け継いだ雑煮は、一口で妻の味だとお感じになり、年明けても、尚寂しさのつのお正月の膳に、奥様を偲んでいらっしやるのである。（雅）

故河野美奇様の御主人様である。グルメで、お料理もお上手であった奥様が居られなくなった最初のお正月ではあるが、やはり雑煮や御節料理は奥様の遺されていたレシピを再現されたのである。正月の目度度さと、故人をしみじみと偲ぶ姿が、不思議な魅力を醸し出している。（廣太郎）

春待てず何に急かされ逝かれしや 長岡 安原 葉

明るい「春を待つ」、心持ちは、何となく希望に満ちたものがあるように思える。したがって、「春」という言葉は、病人を力づける言葉にもなりうるだろう。事実、そのようにして、病気の知人を励まされてきたのだろう。それだけに「春待てず」には、急逝された知人を惜しむ心持ちが、格別にこもっているように思われる。それが雪国の人であったなれば、なおさらのことであろう。（公次）

春待つという季題は、それだけで何か明るい雰囲気漂うものであるが、それを否定的に使う事により、今度は悲しみの表現を強くしている。最愛の奥様を亡くされた作者であるが、その奥様を詠まれたとも想像出来る。宗教的な立場におられる作者の祈りの言葉として伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

届きたるものは校正愛の日に
 春山の見ゆる如くに茶寿そこに
 鬪志まだ老いてはをらず初鏡
 全快をよろこび御慶申し上ぐ
 月見船二万六千噸の宴
 秋の蚊を払ひ年尾を見舞ひし日
 悲しみの身にも取りつく春の風邪
 過ぎ易き七日七日や梅寒し
 夕立のありし風とも思はるゝ
 初霜は無明の闇のおとしもの
 春の風邪重からずして軽からず
 身の程をそこそこ知りぬ春寒し
 日当りていただき眩し二月富士
 六甲の雲の重たき二月かな
 鶴帰るとき神聖な空となる
 ものごころつきたる大地草青む
 シクラメン追憶きりもなかりけり
 ゆつくりと川は春夕焼の中

神戸 後藤比奈夫
 同 相模原 木村享史
 同 東京 稲畑廣太郎
 同 長岡 安原 葉
 同 福山 竹下陶子
 同 東京 今井千鶴子
 同 同 大久保白村
 同 神戸 和田華凜
 同 同 岩岡中正
 同 熊本 同

金子選

瀬戸内の夕映長き麦を踏む
 剪定の思ひ切つたる悔すこし
 うつかりと引きいつまでも春の風邪
 春浅き日ざし受けとり木々の先
 ゆるめては又たぐる糸いかのぼり
 かりそめの輝き放つ薄氷
 近づけば黄の濡れてゐる白菖蒲
 堂裏の空気涼しきひとところ
 更新の旅券眠らせ冬籠
 病室を見舞ふ小さな内裏雛
 刻過ぎて人のこころに菫咲く
 菫咲く菫咲きをり妻偲ぶ
 トーストも春立つ今朝の香でありし
 暁闇に零れきさうな春の星
 菅公の配所に東風の屈きしや
 クレーンに灯るあかりも春の色
 見馴れたるものとなりぬし寒椿
 落ちてゐし色に近づき寒椿

神戸 三村純也
 同 龍ヶ崎 今橋真理子
 同 東京 山田閨子
 同 同 今井肖子
 同 同 今井肖子
 同 神戸 千原叡子
 同 東京 河野昭彦
 同 同 同
 同 金沢 藤浦昭代
 同 同 同
 同 東京 高濱朋子
 同 同 同
 同 熱海 嶋田一步
 同 同 同